

した。

「①は、人権や正義のために権力と闘う場面で、中立ではない。②は、環境保全のほか、権力者が不正義のために非暴力を使う場面もある。③がNPの活動分野で、中立性（紛争当事者のいずれの立場にも立たないこと）が絶対条件。NPの仕事は、紛争当事者が話し合いをするためのスペースを作ることであり、紛争を解決することではない。」

東京ミーティングの際、スリランカでNP事務所に手榴弾が投げられNPのフィールドワーカーが負傷した事件で、「警察に連絡することが一方当事者の側に立つことになるのではないかと議論になったことをデイヴィッドから聞きました。結局、警察には「偏見を持たない捜査を行うよう要請した」わけですが、中立性とは何と難しいこと！ NPの声明も「犯人の動機について残念に思う」というトーンです。

スリランカでの大島みどりさんの経験談は、とても参考になりました。「些細な相談事について、話し合いの場所としてNP事務所を提供したが、内容には関わらず、立会いもしなかった。」「小さな相談事に誠実に対応していくなかで、やっと信頼関係ができ、平和に関することも相談してくれるようになった。信頼関係をつくるのに2年間かかった。」

3 和解

NPの活動分野ではありませんが、社会変革の場面（非暴力で権力と闘う場面）における非暴力の効果として「和解」のことが話されました。非暴力によって、相手を改

心させるとか、降伏させることは少ないので、非暴力の効果として最も期待できるのは和解。そして、「非暴力は暴力より和解をもたらしやすい」。

和解のためには、相手が飲むことのできる条件で、一旦、闘いを収めなければなりません。天安門事件における学生たちの非暴力運動が失敗した一因は、学生たちが次々と要求をエスカレートさせていったことにあるとのことでした。確かに、和解は譲歩ですから、掲げた要求を切り下げてこそ和解であり、それをさらに上げてしまえば、相手との信頼関係を損ない、和解は困難になります。

4 自信と笑顔

ワークショップで印象に残ったものの一つに、全員を2列に並ばせて、その間を「自信をもった歩き方」「パワーを内に秘めた歩き方」で1人ずつ歩く、というのがありました。

1回目は何となく恥ずかしい気持ちで歩きました。

2回目の前に、デイヴィッドから、2列に並んでいる人たちに対し、歩く人をサポートする気持ちになってくださいという指示がありました。

「サポートする気持ち」とは結局、笑顔でした。笑顔で並んでいる人たちの間を歩くことは、何と気持ちがよいこと！

大島さんのスリランカでの体験も印象深いものでした。銃を構えた兵士たちの間を車で通るときにどういう態度をしようかと悩んだ結果、結論は「スマイル」だったとのこと。

後から思い返してみると、デイヴィッドは、いつも笑顔で、「パワーを内に秘めた歩き方」をしていたと思います。

5 連帯感

余談ですが、ワークショップの2日目の朝食（バイキング）をデイヴィッドと一緒に取りましたが、彼はパンと牛乳だけでした。夕食をたくさん食べたからとのことでしたが、私の印象では、それほど食べたわけはありません。スリムなデイヴィッドの食習慣と比べると、私たちは確かに、贅沢で、

太っている、と反省しました。

今後のことですが、「トレーナー養成セミナー」に参加された阿木さんをはじめ、大畑さん、大島さんを中心に、このようなワークショップの機会を設けていただければと思います。最低でも、丸1日、できれば2日間はよいのかもしれませんが。

参加者同士で連帯感を感じることができるとし、会員を増やすよい機会でもあると思います。

【デイヴィッド・グラント氏を囲んで。2006年7月25日】



.....

.....

David Grant による非暴力ワークショップ(その1)

大島みどり 非暴力平和隊・日本理事

.....

.....

注: 英語の power ということばにはさまざまな意味が含まれるので、ここではそのままカタカナ表記とさせていただきます。

第1日目: 7月28日(金)14-19時 (於: 大阪クリスチャンセンター)

テーマ:

- ・ 「パワー(力)」を見る(「パワー」とはなにか)
- ・ 「非暴力のパワー」はどのように働くか
- ・ 「非暴力のパワー」の種類

1. 共同代表・大畑さんより挨拶、およびNPとNPJの説明

2. 参加者自己紹介(名前、所属、参加理由)

3. 「非暴力」とは(David の挨拶):

「非暴力」は決して受動的なものではなく、また自己を犠牲にするだけのものでもない。(マハトマ・ガンジーやキング牧師は聖者ではない。) 正義のためのパワーの闘争である。

4. アクティビティ(1): パワーを持つ椅子の並び替え

7つ程度の椅子を並び替えて(ひっくり返してもなんでもよい)、椅子の配置によって異なって見える、パワーの構図を考える。たとえばひとつの椅子がパワーを持つように見える椅子の配置、戦前の日本社会を意味する椅子のおき方、現在の日本社会を表す椅子の置き方、刑務所を表現する置き方、あるいはすべての椅子が平等のパワー

を持つように見える椅子の配置とは?

5. 抑止(力・論)について(Deterrence):

「非暴力」行動は、政治的な空間を作り出す可能性を持つ。これまで(暴力的であるがゆえに)危険だとみなされていた行動(例えば暴力的なデモ)を、「非暴力」的な行動に変化させることで、これまでできなかった(危険という理由で禁止されていたような)行動(例: デモ)を可能にするという力を持つ。

6. 「非暴力」抗争(闘争)はどのように機能するか、またその例:

1) 変革(Conversion) 相手の意識を変革させる。(めったに起こらない)

2) 受容(Accommodation) 「妥協」とも違うが、相手を受け入れつつ、可能な道を探る。「非暴力」闘争ではよく使われる手段)

3) 「非暴力」革命(Capitulation) パワーを持つ側の完全な崩壊。(めったに起こらない)

歴史的実例:

- ・ 米国市民権運動 ⇒ 受容(パワー所持者は、権力の座に留まる)
- ・ フィリピンのマルコス政権崩壊 ⇒ 「非暴力」革命
- ・ ベトナム反戦運動 ⇒ 受容から変革
- ・ (一般的な)労働者(組合)闘争 ⇒ 受容から変革
- ・ インド独立 ⇒ 受容から「非暴力」

革命および変革

- ・ 南アフリカ・アパルトヘイト問題 ⇒
すべてのカテゴリーを含む

7. 「非暴力」とは:

アクティビティ(2):じぶんの立ち居地を直線状で確かめる各質問に対し、じぶんがその意見を強く支持するか、あるいは否定するか考え、(0から10までの評価として)直線状に立つ位置を選ぶ。(直線の片端が0、つまり支持しない、反対側の端が10、つまり強く支持する。何が正解か、良いかではない。)それぞれ違う立場の人たちからの意見を訊いていく。

質問1) あなたはエアコンを使いますか?

質問2) あなたは女性に対する特別な権利があったほうがよいと思いますか?

質問3) あなたは憲法第9条は、日本を強くすると思いますか?

* それぞれの質問に対しては、質問があいまいであるとの指摘があり、そのせいもあってか、答えられないと棄権する参加者も数名いた。(これについては、翌日 David から追加説明・コメントが別途あった。)

8. 「非暴力」の3つの手法:

- 1) **社会変革(Social Change)** 上記6の、変革、受容、「非暴力」革命。正義のための闘争であり、必ずしも政治的に中立の立場はとらないこともある。
- 2) **社会防衛(Social Defense)** 社会変革のように権力関係の変化は必要としない。例えば、森林保護のために、木によじ登って降りてこない(木を切らせない)など、環境系運動・活動に比較的多い手法。
- 3) **第三者非暴力介入(Third Party Nonviolent Intervention)** 政治的に中立の立場をとる。非暴力平和隊

を含む多くの平和活動チームの活動。

9. 場の雰囲気・空気を変える:

場には、その場の雰囲気・空気、また磁場というものがある。その場をどうやって変えていけるだろうか。

アクティビティ(3):フルーツ・バスケット(日本でもあるゲームです)

アクティビティ(4):自信を持って歩く

- 1) 2列になって向かい合った参加者が作る通路を、列の端の人から、ひとりずつ、反対側の端まで、『自信を持って』歩く。(どのような歩き方、表情をしてもよい。)通路をつくる人たちは、歩いていく人を見送る。
⇒向かい合った人と、どのような気持ちか、どんなことを思い出したか、感想を言い合う。次にそれを、全体で分かち合う。
- 2) 同じようにもう一度歩くが、今度は、周りの人たちが、ポジティブなエネルギー(祈り、励まし、その他どのような思い・形でも)を歩行者に送りながら見送る。
⇒前回とは違うパートナーと再度感想を話し合う。どういう違いを感じたか。最後に全体で分かち合う。

10. アクティビティ(5):じぶんの名前を簡単な動作で表現する

じぶんの名前(姓・名どちらでもよい)をことばで言いながら、それにあう(と自分が思う)像または簡単な動作を行う。

第2日目:7月29日(土)10-18時(於:大阪クリスチャンセンターおよび大阪女学院大学)

テーマ:

- ・ 個人(自己)の「パワー」を使う
- ・ グループの「パワー」を使う

- ・ 日本での「非暴力パワー」の次のステップ

11. 振り返り(昨日学んだこと、残りの時間内での要望):

- ・ ことばは通じなくても(無くても)表情や態度で通じ合うことができる。
- ・ 2列の間を歩いているとき、笑顔の力を感じた。(不安感から安心感へ。みんなから認められているという感覚。)
- ・ 人を信じていくことが非暴力につながる。
- ・ じぶんと違う意見に対して最初はバカにしていたが、よく聴くと、じぶん自身が相手の話を聴いていないことに気づいた。『聴く』という、人と接する基本の姿勢を学んでいるのではないかと思った。
- ・ (David から) 質問への回答を直線状に並んで表現するというアクティビティでは、参加者(日本人)が、「間違えたくない」という気持ちが強いことを発見した。トレーニング・練習のときは、間違えることはよいことだと思う。

12. 元気をつけるためのアクティビティ:

憲法 9 条を多くの人々に親んでもらうために、それをベートーベンの「歓喜の歌」のメロディにあわせて歌うという活動を行っている参加者が、その歌を披露し、全員で歌った。

13. 上(権力)からのパワー(power over)、仲間と分け合い行動するパワー

(power with)、個人(自己)のパワー(power within)についての補足説明:

- ・ ガンジーは、自己の内なるパワー(internal power)を、外部のパワー(external power)につなげていった。

また、彼の戦略は、「統合のパワー」を用いることだった。(相手との信頼関係構築に重点をおいていた。)

14. アクティビティ(6):ムカデになってゴールをめざす(?!)

参加者全員が横向きに一列となり、左足を左側の人の右足と、右足を右側の人の左足と(離さずに)くっつけたまま、全員が一緒にゴールに向かって歩く。ゴールの際は、必ず全員が一緒に線を踏まなくてはならない。隣の人足と離れたり、ゴールを全員が一緒に踏めなかった場合は、再度スタート地点からやり直す。

15. 「非暴力」の3つの手法(3)を中心に補足説明):

- 1) 社会変革(Social Change) ガンジー、キング牧師、スーチャー女史
- 2) 社会防衛(Social Defense)
- 3) 第三者非暴力介入(Third Party Nonviolent Intervention) 『政治的立場をとらない』(non-partisan) ということは、『中間に居る(neutral)』ということと同じではない。世界人権憲章の尊重などという価値観を持つ。また問題を解決するのではなく、政治的空間(政治的な活動のできるチャンスや場)を作ることである。

16. 国際的平和組織・団体と国内(日本)における平和組織・団体(紙面の都合により数団体のみ列記):

【国際】 非暴力平和隊、国際平和旅団(Peace Brigade International)、国際友和会(International Fellowship of Reconciliation)、国連(ユニセフほか)、国際赤十字、ほか

【国内】 非暴力平和隊・日本、国際友和会・日本、ピースボート、ほか

17. アクティビティ(7):名前のもうドラ:

昨日と同じように、じぶんをイメージするポーズ・簡単な動作をもうひとつ作るが、じぶんの名前を口に出してから、まず最初に昨日の動作（ポーズ）を繰り返し、その後きょう新たに作ったものへ移行する。

18. アクティビティ(8-1):脅威(威圧)の像

6人ほどで1チームとなり（今回は3チーム成立）、じぶんがこれまででいちばん脅威（威圧）を感じた場面を思いおこす。演出者になったつもりで、チーム・メイトを役者に、静止したシーンを再現する。この際ことばは一切使用禁止としこのシーンがどういう場面であるのかは、チーム・メイトにも知らされない。演出者は、役者の顔の表情まで演出した後、最後にじぶんもその場面の中のひとりとして入る。それを6人がそれぞれ順番に行った後、話し合っ（もちろんことばの使用可）、誰のシーンを全体と分かち合うか相談する。ただしこの時点でもそのシーンの内容・背景等については、説明しない。チームごとに選んだ作品を、参加者全員分かち合う。観客は、そのチームの誰が演出家（作品の作り手）なのかを推測する。

19. アクティビティ(8-2):脅威(威圧)の像を分析する

再度それぞれのグループに分かれ、演出者からそのシーンの状況・背景について説明を受ける。このシーンを今度は静止画ではなく、過去・現在・未来という流れの中の動画（セリフのあるスキット）で表現する。再び全体に戻り、スキットを見せ合いながら、スキットの状況・背景等についても説明を加える。

20. アクティビティ(8-3):脅威(威圧)を取り除く(避ける)方法を探す

3作品の中からひとつを選び、演出者（脅威を感じている人）が、脅威を感じないような状況に作り変えるにはどうしたらよいかを考える。周囲の観客は、「じぶんならここでこうする」と思った場面でスキットをストップさせ、じぶんが交代したい役者を選び、そのシーンを演じなおす。スキットの流れが変わる。

21. アクティビティ(9):固定観念から抜け出し、新しいアイデアを想像する図形問題

22. 武力を持つ部隊(Armed forces)と非武装部隊(Shanti Sena)の類似点・相違点:

『物質的必要性（車両、制服、お金、コンピュータなど）』、『必要とされる（生活）態度・姿勢や人格（忍耐力、自己犠牲、愛、勇気など）』、そして『行動』という3点から、どこが違い、どこが似ているかを比較する。物質的必要性と態度・姿勢・人格については、かなり相違点が多いことが指摘された。とられるべき行動としては、武力を持つ部隊は、『殺すこと』と『殺されること』があるのに対し、非武装部隊では、『殺されること』は可能性としてあっても、『殺す』ことはないことだった。

23. NPのスリランカ・プロジェクトに関する情報:

スリランカ・プロジェクトに参加していた大島が、トレーニング、給与と福利厚生（保険など）、そして国際チームであるが故のチーム内異文化問題について、簡単に話をした。

24. David からの挨拶:

憲法9条は、非暴力による国への愛であること。

(次号へ続く)

NPスリランカ・プロジェクト発表(報告会)報告

大島みどり 非暴力平和隊・日本理事

6月後半から7月初めにかけて、5人程度の小規模なものから70名ほどの人々が参加された報告会(あるいは発表)を4度ほどさせていただいたので、そのご報告を簡単にさせていただきます。

- **6月18日(日)「スリランカ研究フォーラム」(於:和光大学)における発表**

スリランカに関する研究では多くの著書も出されている和光大学の澁谷先生が中心となって活動するフォーラムに、発表者のひとりとして招待された。この日は第1部が、国士舘大学助教授の川島耕司氏による「スリランカのマイノリティ問題:ムスリムを中心に」というレクチャー、第2部が「復興活動の紹介」というテーマで、「アジアを紡ぐ会」、「スリランカにタコノキを植える会」、そして非暴力平和隊から活動報告があった。20分程度の時間内で、2年間の活動、NPという組織について語るのは困難で、参加者の方々がどこまで理解してくださったか不安が残るが、さまざまな大学からの学生やNGO活動関係者、在日スリランカ人等を含む25名弱のバラエティに富む参加者の、スリランカ内戦に終止符を打つ手助けをしたいという熱意が感じられた。第2部終了後は、自由参加で「第2回スリランカの平和を考える市民懇談会」に移り、内戦再燃の危機にあるスリランカ情勢に対する声明を出すことで、意見が一致した。(声明文については、NPJが賛同することについて後日広報があった。)

- **6月25日(日)「スリランカ事情セミナー」(於:文京区本郷)における発表**

市民交流や文化活動を中心に、幅広い会員層と会員数を持つ「日本スリランカ友の会」主催のセミナーから招待を受け、1時間程度

のお話をさせていただいた。(もう一名の発表者は、スリランカの鉄道の旅ほかについてお話された。)スリランカでのボランティア活動および学習に力を注ぐ中央大学の学生たちから、スリランカに縁が深い高齢の会員まで70名弱の参加者で会場がいっぱいだった。参加者層が主に、企業関係者や観光・文化等の方面に興味・関心を多く持つ方々だった(わたしの思い違いであればご容赦ください)せいか、NPのような活動については、おそらくこれまであまり耳にした事が無いようだったが、スリランカの憂える現状(和平問題)に対する思いは同じで、平和活動もいわゆる『運動』としての側面から、どのように共鳴者(シンパ)や協力者を増やしているかを考えなくてはいけないと実感した。

- **7月1日(土)・2日(日)(於:北区王子および新宿区高田馬場)**

日本へ政治亡命してきたスリランカ人の難民申請を支援する個人とその支援グループから依頼を受け、2回の(それぞれ別の)報告会をさせていただいた。(複雑な事情と守秘義務を考慮し、主催者と難民申請者についての詳細は割愛します。)事前の広報準備が整わず、1日は5名程度の参加者、2日は10名程度だったものの、難民の人々の本国の事情を知りたいという、支援者たちの真摯な態度と姿勢がうかがえる会だった。ひどいと言えない日本政府の難民受入制度について、わたし自身が再考する機会をいただいた。その後TV番組でも、その日本の難民受入れの実態について報道されていたが、この難民受入制度が「非暴力」でないことはあきらかな事実だと思う。

スリランカ訪問報告

大橋 祐治 非暴力平和隊・日本理事

鉄道線路をはさんで海岸べりにある‘海の家’のようなホテルの食堂で朝食をとる。インド洋から打ち寄せる波はかなり荒い。波打ち際からしばらくは遠浅で、その辺から急に深くなっているようだ。2004年末の津波を思い出す。海岸は緩やかな弓なりになっており、北に約10キロ先のコロombo市中心街の高層ビルが波飛沫でけむって見え、南に砂浜を歩いて15分ぐらいのところ去年11月の大統領選挙監視団で来た際に宿泊したリゾートホテルMt.Laviniaホテルが、テラスにあるパラソルが見えるほどすぐ近くに見える。海岸では近くに住む住民たちが朝のウォーキングやクリケットまがいの遊びなどしており、犬たちが戯れている。人々の表情には今日を生きる逞しさがある。ここでは内戦の激化などは(現地の言葉が分からない私には)まったく嘘のようである。

非暴力平和隊・スリランカプロジェクト(NPSL)のアヨミさんという人事係に紹介されたこのホテルは、事務所までおそらく直線距離で5分とかからない場所にあるが、この辺の道はコロomboからスリランカの南端にある世界遺産の街ゴールに通じる幹線道路ゴール・ロードからそれぞれ分岐していて、それらの道をつなぐ通路がないため、一旦ゴール道路に出て事務所のある通りを入らなければならないので、徒歩10分以上、三輪車で100ルピー(100円)かかる。そこで近道として海岸線を走る鉄道の線路伝

いに歩くのだが、朝、晩の通勤時間帯には多くの人達が線路の上を歩いている。日中は1時間に一本も走らないのに、通勤時間帯には10・15分毎に轟音と共に警笛を鳴らして走る電車には、狭い線路脇を時々線路脇に住む住民の仮設住宅内にお邪魔して避けることになる。線路の両脇にはぎっしりと仮設住宅が詰まっており、日が昇るとともに住民は狭い室内(?)から外に出て、主婦たちは家事に、子供たちは早速遊びに興じているが、働ける年齢の若者たちが多いのは働ける場所がないためであろう。ゴール・ロードの両側を見ても住民の生活レベルが良く分かるが、しかし線路脇に住む人達の様子などまではまったく分からない。

今回の3度目のスリランカ訪問は、前の2回と異なりすべて“自己責任”或いは“自前”の訪問である。通常言葉の定義では前2回と同じであるが、今回はNPSLのために日本政府の“草の根無償資金援助”の供与を受けるというまったく見込みの立たない目標にチャレンジしよう、という自分自身の試みでの訪問であるため、日本大使館のアポイントやNPSLの協力、宿泊先、日程などすべて自分で決めなければならない。又、何らかの次につながるような成果がないとまったくの徒労になってしまう、というリスクという不安を抱いての訪問である。こんなことは自分の社会人生活でもまずなかったのではないかと思う。

ほぼ一週間を過ごし(火曜日から火曜日まで) NPJ の一員としての自分にとっては大変有益な経験、知識を得ることができたと思っている。もっとも、当所の目標である“草の根無償資金援助”の供与については、出発点に立っただけであるが。以下、项目的に簡単にスリランカと NPSL の近況を報告したい。

1. スリランカ和平の現状

今年 4 月、ジュネーブでの第 2 回会談が不調に終わって以降、主として北東部での殺害、暗殺など背景不明の事件が頻発、コロンボでの自爆テロもあり治安情勢は悪化しつつあった。一ヶ月前より、東部のトリンコマリー地域で、「タミール・イーラム解放の虎 (LTTE)」が支配地域の貯水池の放流をストップし、シンハリ人農民の灌漑用水が枯渇に瀕する事態に至り、ノルウエーによる LTTE 説得工作中に政府軍が貯水池のある LTTE 支配地域に侵攻し、両者の本格的な戦闘になった。NP の拠点があったムートルがこの戦闘に巻き込まれ、戦火の激しいムスリム居住地域から大量のムスリム人が戦火を逃れて国内難民になっている。3 万人ともいわれる難民が、主として 60 キロ西のカンターレという町で避難生活を送っている。彼らの帰還には政府、LTTE 両者の戦闘中止の保障が必要であるが、今その見通しは立っていない。

8 月 10 日前後より LTTE のジャフナ侵攻作戦が始まった。もともとジャフナは孤立した政府の支配地域であり、2000 年にはもう少しで LTTE の手に落ちるところまでいったとのことである。‘海の虎’といわれる LTTE の海軍は強く、南部の LTTE 拠点からの砲撃や侵攻に加え、海上から戦略拠点に上陸作戦を敢行しているようである。LTTE

がジャフナ作戦とトリンコマリー作戦をどう絡めているのかの議論があるが、よく分からない。20 日現在では 2000 年とは異なり政府軍は十分 LTTE を圧倒しているとの新聞情報である。尚、新聞情報は政府サイドである点注意を要す。

このように 2002 年の停戦協定は実質的には機能していないが、政府、LTTE ともにまだ停戦協定は有効であると発表している。ジャフナの戦況に決着がつけば、それを踏まえた和平プロセスへの復帰を考えているのだろうか。私たちが到着した 14 日 (月曜日) の朝、在スリランカ・パキスタン大使がコロンボの中心街でテロに遭遇し、大使は無事であったが、警護の SP を含め 7 名の死者を出した。外国の要人を狙った (かどうかは 100% 確かではないが) テロは 1991 年インドのラジブ・ガンディ首相暗殺以来のことで、これにより G7 の中で唯一の例外である日本が LTTE をテロ指定する可能性は高まったとの説もある。一方、EU の LTTE テロ指定で LTTE から EU 加盟国のスリランカ停戦監視団 (SLMM) からの引揚の要求に対しては、ノルウエーとアイスランドがそれぞれ増員をコミットし、又アジア諸国から SLMM に参加するとの話もある。当面、不安定な情勢が続くそうである。

2. NPSL の状況——FTM 関連——

8 月 11 日でフィールド・ワーカー (FTM) 第 3 陣の in-country-training (赴任国内訓練) を終えて、14 日よりそれぞれの任地に赴任する予定であったが、上記のようなスリランカの情勢に鑑み、バチカロア・グループ、トリンコマリー・グループ、ジャフナ・グループそれぞれ慎重に現地情勢を分析し、全員の意思を確認しながら徐々に赴任地に移動中である。私たちが到着した翌日の 15 日から

事務所に席（確定した場所ではない）を置いているが、午前、午後と毎日各グループが打合せを持ち、或いはアンジェラやマルセル、人事、広報マネージャーなどとせわしく打合せ、そして次々と出発していくさまには大変緊張感、臨場感を感じさせられた。

12名の第3陣を加え、FTMは計25名（1名兼務）、各拠点4名から6名の体制である。

（表1参照）バチカロア・グループ（バチカロア、ヴァルチェナイ）は16日現在の拠点に向けて出発した。トリンコマリー・グループ（トリンコマリー、ムートル）は、ムートル事務所が閉鎖中、トリンコマリーも治安情勢が十分把握できていない現状で、とにかく途中のハバラナまで行き、そこでトリンコマリーまで行くか、或いは別の場所に臨時的に拠点を設け、そこからムートルの国内難民がいるカンターレも含めてトリンコマリー地域をカバーするかを決めるとのことで、17日に出発した。全員が出発したのかどうか、トリンコマリー・グループに配属された新人をその後も事務所で見かけるので確かめようと思っている。（21日に3名のトリンコマリー・グループが出発し、22日に2名のヴァチカロア・グループが修理を終えた4輪駆動車で出発し、コロomboからいなくなった。）

ジャフナ・グループは現在、民間人のジャフナの出入りが禁止されているので、コロomboで待機せざるを得ない状況である。コロomboから現地のLNGOや現地スタッフとコンタクトしている。ジャフナのみ現地人の運転手を採用しており、2名の運転手がFTMと共にコロomboまで来ており、ジャフナに残された家族とどのようにreunionさせるかを真剣に検討している。22日現在、緊急物資輸送のために貨物船一隻がコロomboからジャフナに出航との話がある。貨物船の帰途は

ジャフナから負傷者や脱出希望者を乗せてコロomboに帰る計画である。今のところ一船しか計画がないので、コロomboからもジャフナからもこの機会を目指したくさんの人達が枠に入るよう種々手を尽くしている。結局、2名の運転手はジャフナに帰ることにした模様。危険があっても我が家がやはり心配なのであろう。

3. NPSLの財政状況

NPSLは現在コロombo事務所にマルセル以下8名、FTMが25名（1名兼務を数えると26名）、フィールドの運転手、通訳など含めおおよそ50名の体制となっている。2006年度の予算規模は約100万ドルで現地調達資金はUnicefから21万ドル、Cordaid（スペイン地方政府）10万ドル、ChristianAidから7万ドル、残り60万ドル強をNP本部から、即ち、個人の寄付や、基金、宗教団体からの援助でまかなわれている。

国際機関、外国政府からの資金援助はスリランカ・プロジェクトに対して行われており、具体的な折衝はNPSLが責任窓口になってコロomboの各出先機関（国の場合は大使館）と頻りに折衝している。主としてマルセルがこの任に当たっているが、カナダ政府、オーストラリア（INGOのOXFAMとAustraliaAid）、UNHRCなど新たな資金提供先と折衝中であり、そして、これから日本政府に対しても、願わくば“草の値無償資金援助”を申請する予定である。たまたま小生の滞在中、ヨーロッパ・コーディネーターのアレサンドロ・ロッシ（Alessandro Rossi）がイタリアから出張して来ており、この面でマルセルの右腕として大いに活躍している。こうした出張ベースでNPSLの活動を支援することができれば、NP、NPSLともども更なる発展が期待できるのではなかろうか。

NPSL の事務所にいると、正にグローバルな活動の真っ只中にいることを日々実感できる。オランダ (マルセル)、イタリア (アレサンドロ)、カナダ (アンジェラ)、バングラデシュ (イクバル 人事担当)、スリランカ (ディルシャン 広報、他スタッフ)、それに今は出払ってしまったが、FTM19 カ国を加えれば、スリランカを含め 23 カ国の人々が NPSL でスリランカの平和のために活動していることになる。残念ながらここには常駐の日本人が今はいない。自分は日本からの資金援助を得るための支援として一時的にここにいるが、大使館との面談以外に、申請書類やそれに必要な添付資料は英語であり且つフィールドからの情報が重要であり、何処まで役に立てるか、おのずと限界があり非力さを感じさせられている。しかし、NPJ の一員として最善を尽くしたい。

4. コロンボスタッフ紹介

最後に、最近 NPSL に加わった広報担当のディルシャン (Tuan Dilshan Muhajarine) を紹介しよう。非常にソフトで人当たりがよく、色々なことで懇切丁寧に自分の意図が理解されるまで辛抱強く説明してくれる。その説明のしかたも色々な状況を想定したり、設定したりして、それらに対応して背景や理由を説明してくれるので、最後はなるほどと納得することになる。それで

関心を持って少しディルシャンの事を調べた (人事担当よりの資料で)。

ディルシャンはスリランカとマレーの混血であるが、彼の兄が 1987 年南アフリカでデズモンド・ツツ司教の人種差別反対運動に加わったことから、ガンディの非暴力運動に関心を持つようになった。彼が 5 歳のころ、彼自身が自分の住む社会で人種問題の種になったことで民族問題やそれに伴う争いを経験したとのことである。高校を卒業して AFC(American Field Service)でオーストラリアに交換留学した後、アメリカのオハイオにある大学で‘建国時における国語政策の影響’について学んだ。スリランカに帰国しジャーナリズム分野で働き、Berghof 紛争問題研究所スリランカ事務所での 5 年間の経験を経て NPSL に参加した。彼の肩書きは“Communication Manager”であるので、‘広報’と訳すのは適切でないかもしれない。情報収集、情報伝達など NPSL にとって重要な役割を帯びている。彼を紹介したのは、NPSL には様々な幅広い経験、或いは得がたい経験をした人達が多くいることの一例としてである。 <終わり>

2006 年 8 月 22 日

コロンボの NPSL 事務所にて記す

大橋 祐治

【表 1 FTM体制】

拠点名	名前	姓	国籍	参加時期	性
Jaffna	Aila	Jibo	Kenya	2006/3/1	M
Jaffna	Eva	Ramirez	Spain	2006 年 8 月	F
Jaffna	José	Acosta	Colombia	2006 年 8 月	M
Jaffna	Susan	Granada	Philippines	第 1,2 陣	F
Jaffna	Todd	Kranock	USA	第 1,2 陣	M

Mutur	Butera	Muhamed	Rwanda	2006年8月	M
Mutur	Crina	Resteman	Romania	2006/3/1	F
Mutur	Fabijan	Periskic	Serbian	第1,2陣	M
Mutur	Shiva	Adhikari	Nepal	2006年8月	M
Mutur	Silke	Nebenfuehr	Austria	2006年8月	F
Trinco	Adejo	Haruna	Nigeria	2006年8月	M
Trinco	Emiliy	Rosenberg	USA	2006年8月	F
Trinco	Giorgio	Ferlisi	Italy	2006年8月	M
Trinco	Kati	Hoetger	German	第1,2陣	F
Trinco	Oloo	Otieno	Kenya	第1,2陣	M
Valach	Charlotte	Sjöström	Sweedeen	2006年8月	F
Valach	King	Ayettey	Ghana	第1,2陣	M
Valach	Kwan-Sen	Wen	Taiwan/Egypt	第1,2陣	M
Valach	Lucia	Benuzzi	Italy	2006年8月	F
Valach	Rita	Webb	USA	第1,2陣	F
Bati	Daniel	Tripp	UK	第1,2陣	M
Bati	Karen	Green	UK	第1,2陣	F
Bati	Parwez	Anis	India	2006年8月	M
Bati	Pramila	Sinha	Canada	第1,2陣	F
Bati	Sunzu	Salvator	Burundian	第1,2陣	M

<<緊急行動ネットワークの発動について>>

大畑 豊 非暴力平和隊・日本共同代表

スリランカ政府と LTTE との衝突が激化し、停戦合意後、最悪と言ってもいい状態になっていると思います。

そのような状況の中、多くの市民の犠牲が出ていることを憂慮し、傷病者移送等のためにスリランカ政府と LTTE に対して少なくとも 24 時間から 48 時間の即時停戦を求めるよう、緊急行動ネットワーク (ERN) が 8 月 3 日に発動されました。これは今年 3 月末にトリンコマリー市に住む医師一家に対する脅迫に関して発動されてから 2 件目になります。

この行動に応答し、ERN 登録者 50 人ほどが両当事者に要請、登録者以外にも約 300 人の支援者が要請行動に参加しました。そしてその影響は明らかで、この行動のあと、スリランカ政府当局は NP メンバーの安否について問い合わせをしてきました。

以下、緊急行動の要請文です。

ご協力・ご参加していただきました皆さまには感謝致します。

2006年8月3日グリニッチ標準時20時20分

緊急行動ネットワーク

メル・ダンカン 非暴力平和隊・事務局長

親愛なる友人と同志たちへ

緊急事態について連絡します。国際社会ではあまり注目されていませんが、今週東部スリランカで激しい戦闘が起きています。火曜日以降、私たちのチームがほぼ3年間活動して来たトリンコマリー県のムトゥール、サンプル、およびマヴィル・アール地域で、LTTE(タミル・イーラム解放の虎)と政府軍が戦っています。ムトゥールの町では、市民のための基幹施設がすべて破壊され、市民たちは、タミル人もムスリムもシンハラ人も同じように、モスクや教会や学校に避難所を求めています。人々が避難していた病院と学校の1つは砲弾を浴びて、10人が死に、多数のけが人が出ています。

ムトゥールの町を通っていた救急車も攻撃されました。人々は、48時間以上水も食べ物もない状況に置かれており、病院は医薬品もなくスタッフを不足しているため、まったく、あるいはほとんど機能していません。病人もけが人も医療処置を受けられません。ムトゥールに閉じ込められている市民のなかに、非暴力平和隊のスタッフ5人とその家族がいます。トリンコマリーの町にいる非暴力平和隊の国際的なスタッフは、ムトゥールのメンバーと連絡を保っており、ムトゥールにいる2万5000人の人々は町を退去したいと願っているが、戦っている両当事者が妨げているために、退去できずにいる、と伝えて来ています。

「この状況に直面して、そしてムトゥールとその他の地域における市民たちの運命に対する懸念から、私たちは、スリランカ政府とLTTEに対して、病人や負傷者をトリンコマリーの病院へ搬送するため、ならびに戦場から退去したいと願う人々が退去できるように、少なくとも24時間ないし48時間の即時停戦をおこなうよう緊急にアピールします。私たちは、この紛争にかかわるすべての当事者に対して、戦時における民間人の保護を規定した国際人道法の規範を想起するよう求めます。戦争における、民間人居住地域と救急車ならびに避難所への攻撃は許し難いものであり、直ちに中止するべきです。」

以下に提案する手紙をスリランカ大統領 M.Rajapakse 氏および LTTE のリーダー V.Prabhakaran 氏に、ファックスか電子メールあるいは郵送し、そのコピーを政府と LTTE 両方の和平担当秘書に送付することによって、このアピールを支援してください。

このアピールを NP の一般的データベースを通して受け取られた方は、CSchweitzer@nonviolentpeaceforce.org宛てに、あなたの手紙のコピーを送信するか、あるいはファックスしたというだけの情報をお送りください。

また、このアピールをNPの緊急行動ネットワークを通して受け取られた方は、ern@nonviolentpeaceforce.org宛てにお知らせください。

敬具

【小林善樹・訳】

[訳者注]

以下にスリランカ大統領宛て(cc:和平担当秘書官(SCOPP))およびLTTEのリーダー宛てに出す同文のアピール文の案が書かれています。内容は上記の《》内の前後に次の文が書かれています。

拝啓

私は、トリンコマリー県のムトゥール、サンプール、およびマヴィル・アール地域で起きている人道危機について知ったことに深い懸念を抱いています。政府軍とLTTEとの間の闘いは48時間以上続けられており、その攻撃の中で多くの市民が負傷したり死亡しています。【続いて《》内の文章、その後には次の文があります】

私はこの情報を国際的NGO非暴力平和隊のネットワークを通して受け取りました。非暴力平和隊は、常に「政治的に立場をとらない」姿勢を堅持しており、非暴力な手段によって市民たちを支援することによってのみ動機づけられています。非暴力平和隊は2003年からスリランカに入り、市民の招聘のもとに、紛争の非暴力的解決を支援し、コミュニティのために活動しているスリランカ人の保護のために活動して来ました。現在NPの地域スタッフ5人が、他の市民たちとともにムトゥールに閉じ込められています。

敬具

大統領と和平担当秘書官に対しては、e-mail、ファックス、郵便いずれでもOKです。e-mailの場合、宛先は secretary@presidentsoffice.lk で、cc を info@scopp.gov.lk 宛てにし、タイトルは **REQUEST: Immediate Ceasefire and Respect for International Humanitarian Law in Sri Lanka** でいいと思います。最後に送信者の氏名とメールアドレスをつけます。

LTTEリーダーに対するファックスは、最後に送信者の氏名とメールアドレスをつけて、[国際電話会社の番号](NTTコミュニケーションなら0033、日本テレコムなら0041、KDDなら001など)[001][94- 21- 222- 3959]宛てに送信します。

実は私も大橋さんもこの番号宛てにファックスしているのですが、相手の応答がなく、送信できずにおります。

なお、大橋さんがクリスティーネ・シュヴァイツァーから、8月4日16:56に受信された以下の情報を追記します。

Dear friend,

Thank you for joining the emergency request.

This morning the news are that the non-Tamil population has been allowed to leave Mutur. There seems to be a march of several thousand people (estimates go up to 25,000!) to a safe place in the South. Thanks for responding so quickly!

Greetings

Christine

親愛なる友へ

緊急行動ネットワークへの参加に感謝します。

今朝、タミル人ではない人々がムトゥールを退去することが認められた、とのニュースがありました。2万5千人にもものぼると推定されている人々の行列が南部を目指しています。迅速な対応に感謝します

*****大統領宛て*****

Mr. Mahinda Rajapakse
President
Socialist Democratic Republic of Sri Lanka
C/O Office of the President
Temple Trees
150, Galle Road
Colombo 3
SRI LANKA
Fax: +94 11 2472100 / +94 11 2446657
Email: secretary@presidentsoffice.lk

cc: Secretariat for Coordinating the Peace Process (SCOPP)
Fax: +94 11 5554473
info@scopp.gov.lk

Your Excellency,

With deep concern I have learned of the humanitarian crisis in the Muthur, Sampur and Mavil Aaru areas of Trincomalee District. Fighting between the Army and the the LTTE has now gone on for more than 48 hours, and many civilians have been wounded and killed in the attacks.

In the face of this situation, and in concern for the fate of the civilian population in Mutur and other areas, We appeal urgently to you to implement an immediate cease-fire, at least for 24 to 48 hours in order to allow the sick and wounded to be transported to Trincomalee hospital and those who wish to leave the battle grounds to do so.

We remind all sides in the conflict about the standards of International Humanitarian Law which prescribes the protection of civilian population in war. Attacks on civilian areas, ambulances and shelters are intolerable and have to stop immediately.

I have received this information through the network of the international NGO Nonviolent Peaceforce. Nonviolent Peaceforce has always maintained an impartial position and is solely motivated by assisting civilians through nonviolent means. It has been in Sri Lanka since 2003 and works at the invitation of civilians to support nonviolent conflict resolution and the protection of Sri Lankans working for their communities. At the moment, five of NP's local staff are trapped in Mutur together with the other civilians.

Yours sincerely

*****LTTE のリーダー宛て*****

Mr. Velupillai Prabhakaran
c/o LTTE Peace Secretariat
Fax +94- 21 222 3959

Dear Sir,

With deep concern I have learned of the humanitarian crisis in the Muthur, Sampur and Mavil Aaru areas of Trincomalee District. Fighting between the Army and the the LTTE has now gone on for more than 48 hours, and many civilians have been wounded and killed in the attacks.

In the face of this situation, and in concern for the fate of the civilian population in Mutur and other areas, We appeal urgently to you to implement an immediate cease-fire, at least for 24 to 48 hours in order to allow the sick and wounded to be transported to Trincomalee hospital and those who wish to leave the battle grounds to do so.

We remind all sides in the conflict about the standards of International Humanitarian Law which prescribes the protection of civilian population in war. Attacks on civilian

areas, ambulances and shelters are intolerable and have to stop immediately. I have received this information through the network of the international NGO Nonviolent Peaceforce. Nonviolent Peaceforce has always maintained an impartial position and is solely motivated by assisting civilians through nonviolent means. It has been in Sri Lanka since 2003 and works at the invitation of civilians to support nonviolent conflict resolution and the protection of Sri Lankans working for their communities. At the moment, five of NP's local staff are trapped in Mutur together with the other civilians.

Yours sincerely

ニコラス・メレ
非暴力平和隊 通信担当理事
nmele@nonviolentpeaceforce.org
1-360-671-0238

日本のお気に入りの植民地・沖縄より③

あん・めんそーれー 日本人

城間 悠子 非暴力平和隊・日本理事

きっと通じないだろうなと思いつつも「あん・めんそーれー」と言いたくてしかたがない。むろん、そんな言葉は存在しないのであるが、今の私はそういう気分なのだ。

「めんそーれー」とは沖縄でようこそとか、いらっしゃいといった歓迎を意味する言葉である。空港から観光地まで沖縄を訪れる者はよく目や耳にするはずだ。まあ、観光客用につくられたものといってもいいくらいだし、そういう気もまったく起こらないから、私は使わないけど。

そう、だから、「あん・めんそーれー」とは「めんそーれー」に英語の否定語の「あん」を勝手につけてみた私の造語だ。これに込めた私の思いは「歓迎しない」ということである。誰を？と聞かれば、日本人を！である。厳密に言えば、日本人の植民地主義を！だ。

そんなことを言うとたいていの場合、日本人に嫌な顔されたり、キレられたりするのおちだ。どうやらとてもシゲキテキらしい。本当のことだからなのだろうか。

「私はいま沖縄を日本の植民地にしています」と宣言するわけじゃないから、わからないふりができるだけだと思う。

ちょっと整理してみる。

疲れた日本人を癒すところだそう。日本が経済発展して豊かになる上で失ったものが残っているところだと言う。

9. 11のあと、米軍基地があって危険だから怖いからと沖縄を訪れることを露骨に拒んだ者たちが、癒されて楽しむところなのである。倫理矛盾しないところが不思議だ。

かなりの日本人が沖縄にいる。観光やら移住（入植）やら。日本人にとって沖縄はテーマパークなのだろう。基地つきの。

それから、一部の平和を望む良心的風日本人も困ったものである。例えば運動家とか。自作自演である。自ら基地を押し付けておいて、沖縄に来て連帯うんぬんというのは自作自演者というのがふさわしい。

まったくこっけいな人々である。そういった人々の行為に私は全然癒されない。むしろ機嫌を損ねてしまうだけなのだ。

話はたってシンプルである。日本の沖縄への植民地主義が基地問題という形で表面化しているだけの話なのだ。日本人のものである自衛隊基地と米軍基地を日本人に返すだけなのだ。なぜなら、沖縄人のものじゃないから。

米軍再編にしたって、日本のどこかに新たに基地をつくることはないのに、沖縄だとそういう話はきりが無い。

1995年の米兵3人による少女暴行事件。あの少女が私でもちっともおかしくなかったのである。そして、今日私の頭の上に米軍ヘリが落ちてこようが、米兵にレイプされようがおかしくない。もしそうなっても、どっかの政治家が「誠に遺憾です」なんて言って、どっかの議会在が抗議声明だして、どっかの市民団体が抗議しておわり。そうやって、済ませようとするのでしょう。

そのうえ、基地の被害者でなく、加害者にもなる。殺したくもないのに、殺す手伝いを日々していることになっている。共犯者になるのはどうしようもなく嫌なのだ。

日本はアメリカの犬だという批判がある。はい、おっしゃるとおり。でもね、全部アメリカのせいにしてばかりはいられないのは本人が一番わかっているはず。なぜなら、その選択肢を選び続けているのは日本人なのだから。むしろ喜んでチョイスしているようだ。

日本サイドから沖縄人は基地反対の声小さい。どうせお金がほしいのだろう。日本人が沖縄人に言う資格はないと思う。

日本国憲法の平和主義と日米安保が今日まで共存できたのも沖縄のおかげ、沖縄に基地を押し付けているおかげじゃなかったのか。

そもそも日本人の責任はどこに行ったのか。そこが問題なのだ。

私は沖縄人としてただその責任を果たすだけなのだ。必要とあれば、何度でも言うし、つたない文章でも書くことにしている。あと80年くらいは生きるつもりだから。こんな状況じゃ殺されちゃう。

日本が沖縄を侵略した歴史は変えられないけど、いま沖縄を植民地化していることは変えられる。そうし続けることは変えられる。

だって日本人の意思の問題だから。

沖縄の人が死のうが苦しもうが、できるだけ、可能な限り、ぎりぎりまで沖縄に押し付けておきたいというのが、日本人の本音ではなからうか。従順で、やさしくて、日本人にはおかない沖縄人のもとに。

沖縄に基地を押し続けられることはやめられる。今すぐ。あなたの意思で。

話はやっぱり超シンプルなんだけどな。

開き直る？無視する？知っているけど知らないふりをする？別の選択肢もありますけど、いかがなさいますか、日本人様。

お詫び：前号の連載で、連載タイトル「日本のお気に入りの植民地・沖縄より②」が抜け落ちました。お詫びいたします。（編集部）

2006年9月3日

藤村 陽子 元 PBI インドネシア・プロジェクト

まだまだ残暑の続く日本だと思えますが、皆様、お元気ですか。私はいつものように元気いっぱいアチェで活動しています。そして2006年7月下旬をもって、PBIとの契約を無事終了しました。今回はPBIでの活動を振り返ってレポートを書かせていただきたいと思います。

*

6、7月とPBIアチェチームはほとんど、平和教育活動で忙しくしていました。高校生向けの平和トレーニングを成功させ、その他の活動の準備を主にやっていました。しかし、もう一方の活動であるクライアントの安全の確保のほうでも変化がありました。PBIは6、7月でもう一度、クライアントの安全面とPBIの必要性を確認するアセスメントを行い、ほとんどのクライアントと契約を更新しないという結果を出しました。

その理由は、①アチェでの平和が定着し、クライアントが人権または平和活動に難なく従事できるようになったこと。②クライアントのほうからの護衛的動向の以来が1年以上なかったこと、そして③クライアントがPBIのサービスを必要としないでも活動に従事できると確認したことです。その結果、現在のPBIアチェチームのクライアントは13団体から3団体になりました。この3団体に関しては、過去1年以内に護衛的動向の依頼があ

ったり、安全面に関して疑問を持っている団体であつたりします。

この結果に関しては、私はとてもいいことだと思えます。PBIの活動依頼がない＝平和ですから！アチェチームのほうも、現在、3名が両方の分野を兼任し、3名が平和活動専任として活動しており（9月3日現在）、活動も平和教育にどんどん重点を置く形になっています。

*

さてさき程触れました高校生向けの平和トレーニングですが、これは地元のNGOに依頼され、協力して行いました。これは3日間のキャンプを通じて、高校生に平和と人権について学んでもらおうというものでした。高校生はバンダアチェにある高校の中から20名くらいが色々な高校から参加しており、男子と女子の割合は7対3くらいでした。

私はこのなかで、人権という科目を担当し、簡単に、人権とは何か、そして私たちの身近な人権とは何かを高校生に考えてもらいました。それはとても基本的なことだったのですが、参加していた高校生たちはとても熱意を持って私の話を聞いていたり、グループワークに参加していました。そして、キャンプ後のアンケートでは、次はもっと人権について学びたいと回答した参加者がほとんどだったと聞き、とてもうれしかったです。

そしてキャンプ終了後もこの人権を重点に置いたフォローアップてきなトレーニングがそれぞれの高校で行われています。今後、人権に関心を持つ高校生が増えることを期待しています。

*

PBI との契約を終了するに当たって、後に残るメンバーに私の経験と知識を残していきたいと思い、たくさんのペーパーワークをしました。そして、なんとかそれを終えることができ、7月下旬に帰国しました。現在は国際移住機関（International Organisation for Migration ; IOM）という国際機関で紛争後処理の部門で8月7日から働いています。場所は再び、インドネシアのアチェです。

現在は元反政府組織で活動していた兵士や投獄されていた兵士などの社会復帰を手助けするしごとです。主に彼らの就職

面から見た社会復帰を目指しています。再就職したい人への教育を提供したり、自営業を再開、または新しく再開したい人への資金的技術的支援を担当しています。

じつは、PBI で得た知識がかなり役立っています。PBI でアチェの紛争について、人権侵害について、そして平和教育について得た知識が特に役立っています。PBI に感謝しつつ、これからは IOM のスタッフとしてですが、アチェチームのメンバーとも協力していきたいと思います。

*

皆様、1年と4ヶ月の間、私の活動を応援してくださってどうもありがとうございました。皆様の支援があったゆえに PBI での活動を途中で投げ出すことなく終了できたのだと思います。これからも活動団体は変わりますが、アチェの平和に向けてがんばっていきます。



<現在 IOM で一緒に活動している仲間と>

夏季カンパにご協力いただきありがとうございました。

9月1日現在、31件(30人と1団体)の方々からカンパをお寄せいただいております。合計金額は231,330円となりました。こころより感謝申し上げます。

会費収入とカンパがNPJの活動を支える2本柱となっております。今後もNPならびにNPJの活動活性化、そして会員拡大のために努力して参りますので、みなさまのいっそうのご支援をよろしくお願い申し上げます。

共同代表 君島東彦 大畑 豊

事務局長 安藤 博

★カンパにご協力いただいた方々（順不同・敬称略）

柳沼清正、小出啓子、東豊久、安藤博、大畑豊、渡辺俣子、草島豊、高柳博一、佐藤多鶴子、岡崎善郎、本東宏、酒井良治、蛇石郁子、鞍田東、山本賢昌、大橋祐治、信楽峻磨、君島東彦、正田利子、塩見幸子、大石裕子、岡本三夫、中里見博、馬淵広子、小林善樹、江川嘉美、青木護、ふくしまNPネット、田中泉、阿木幸男、黒木あい、山本竜也

9月理事会の概要報告(報告者：書記 小林善樹)

9月2日、広島の「岡本非暴力平和研究所」において、9月理事会が開催されましたので、その概要を報告します。(理事総数17名中、8名出席、委任状出席6名で理事会成立、欠席は3名)

- 審議事項-1 NPJが参画しているGPPAC JAPAN(「武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ」日本ネットワーク)が企画している9・21国連ピース・ワン・デー「東京キャンドルアクション」への協賛要請について、NPJとしてこれに協賛することとし、協賛金(団体一口3,000円)として、5口15,000円を拠出することとする。
- 審議事項-2 NPJに対し2千万円の遺贈がありました。その用途について、君島・大畑共同代表、安藤事務局長で相談

のうえ、財政窮迫下のNPに一刻も早く役立てようとの主旨により、NPへ1500万円、NPJが活動支援しているPBIへ200万円、NPJ活動資金として300万円(今後のNPへのカンパも含め)という案が出されました。この提案に対して、理事会メーリングリストを通しておこなわれて来た意見交換の内容を踏まえて審議したが、最終的結論に達することはできず、暫定的に、理事会メンバーの大方に異論のない金額500万円をとりあえずNPへ送金することとする。残金については、NPへのさらなる支援並びにNPJ活動強化に向けての具体策などを検討し、次回12月の理事会までに結論を得ることとした。

- 次回理事会は12月3日(日)13時30分～16時30分、京都にて開催の予定。

日韓交流ツアーへのお誘い

非暴力平和隊・日本(NPJ)のみなさま、先日、事務局長の安藤さんから呼びかけがありましたが、日韓交流のイベントについて、話が進んでいます。特に会員のみなさまのご参加を大歓迎いたします！

＜日韓交流会議、11月24日・夜～25日、ソウルにて！＞

＜日 程＞

11月24日(金)18:00～20:00 NPJとNPC(非暴力平和隊・コリア)のそれぞれの

活動やビジョンについて、分かち合う

写真を使ったり、歌を歌ったりする予定。

その後、NPC主催の歓迎パーティ。

11月25日(土)10:00～14:00 ピース・ツアーと称し、ソウル内・近郊の平和スポット、

あるいは、平和・人権団体を訪問し、共に楽しく学ぶ。

15:00～17:00 NPJとNPCが、今後どのような具体的な協力体制を

築くことができるかを自由に話し合う。

その後、NPJ側からの感謝の食事の予定。

とにかく、非暴力平和隊の仲間として、一番近くの韓国の仲間たちと、突っ込んだ話をしたり、ツアーをしたりして、友情を育もう！というのが、今回のソウル訪問の趣旨です。老若男女、どんな方でも参加大歓迎です！もし、何かご心配な点がありましたら、ご遠慮なく、事務局までお尋ねくださいませ。

また、渡航の旅程は参加者個々に異なるでしょう。しかし、宿泊場所はできるだけ同じにして一緒に行動ができるよう、比較的安くて快適なところをまとめて予約しようとしています。ご希望の方は、早急にNPJ事務局(担当 安藤博)までお申し込みください。いま考えられているソウル市内のゲストハウスは、あまり多くが泊まることはできませんので、お申し込み先着順とさせていただきます。

みなさま、どうかご都合をつけ、奮ってご参加下さい。

非暴力平和隊・日本(NPJ)

事務局長 安藤 博

◆◆◆ 第3回 希望のための非暴力セミナー ◆◆◆

＜希望のための非暴力セミナーとは？＞

2004年から私たちは非暴力について考える連続講座を開いてきました。非暴力という言葉は多少聞いたり、使われるようになってきても、その本質はまだまだよく理解されていないと感じています。

私たちは非暴力という考え方、生き方、そして行動の仕方が、これからの地球の未来を切り拓く重要なカギになるのではないかと考えています。

人を押しつけたり、抑圧したり、差別したり、威嚇したり、殺しあったりする社会に希望はありません。またそれらに無関心でいることで、そうした行為に結果

的に自分が、人びとが加担してしまっている社会にもやはり希望はありません。

それに対し私たちが考える「非暴力」は、人と人が支えあい、つながりあいながら積極的に希望を生み出すものです。自分を変え、そして社会を変える希望の思想としての非暴力の可能性を探っていききたいと思います。

「非暴力連続講座」から新たに名前を変えてスタートする「希望のための非暴力セミナー」を通して、社会を変えていくちからとなる、非暴力の輪を広げたいと思っています。あなたの参加をお待ちしています。

「英国とイスラエル・パレスチナでの非暴力実践から」

今回の講師は、非暴力平和隊・日本の会員であり、つい先ごろ平和学部で有名な英国・北イングランドにあるブラッドフォード大学修士課程で平和学を学んでこられた中原さんです。

中原さんが学んだブラッドフォード大学内外での平和・非暴力についての体験と、それと前後してイスラエルに赴きISM (International Solidarity Movement: 国際連帯運動) の活動に参加した貴重な体

験について話していただきます。中原さんはそこでパレスチナのヨルダン川西岸地区のラマッラ市の近くのピリンという町でのデモに参加しながら、イスラエル軍のパレスチナ・ガザ地区とレバノンへの侵攻に揺れるイスラエル・パレスチナの双方を間近でご覧になりました。

非常にホットで、今後の非暴力のあり方を考える上でも大事な体験談が聞けると思いますので、ぜひともご参加下さい。

○講師：中原 隆伸さん

(非暴力平和隊・日本会員、英ブラッドフォード大学修士課程平和学専攻)

○日時：9月30日(土)午後6時半～9時

○会場：文京シビックセンター・4階和室1

東京都文京区春日1-16-21 TEL: 03-5803-1105

地図 <http://www.city.bunkyo.lg.jp/shisetsu/civic/index.html>

○交通：東京メトロ地下鉄丸の内線・南北線「後樂園駅」徒歩1分

都営地下鉄三田線・大江戸線「春日駅」徒歩1分

○参加費：800円

○主催：非暴力平和隊・日本(NPJ) TEL: 080-5520-3077

npj@peace.biglobe.ne.jp <http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/>

ピースネット TEL: 03-3813-6490

peacenet@jca.apc.org <http://www.jca.apc.org/peacenet/>

会 員 募 集

- 非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」をご利用下さいますようお願いいたします。

☉ 正会員（議決権あり）

- ・ 一般個人：1万円
- ・ 学生個人：3千円
- * 団体は正会員にはなれません。

☉ 賛助会員（議決権なし）

- ・ 一般個人：5千円（1口）
- ・ 学生個人：2千円（1口）
- ・ 団体：1万円（1口）

- 郵便振替：00110 - 0 - 462182 加入者名：NPJ

* 通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。例：賛助個人1口

- 銀行振込：三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義：NPJ代表 大畑豊

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

- ウェブサイトからのお申し込み：<http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/nyukai.html>

☒ 案内：『平和・人権・NGO すべての人が安心して生きるために』君島共同代表が『平和・人権・NGO すべての人が安心して生きるために』（新評論）に、「平和をつくる主体としてのNGO」という章（約30ページ）を書いており、この中で非暴力平和隊のことを詳しく紹介しています。出版社のご厚意により、この1章の抜き刷りを作成し、配布させていただけることになりました。是非、非暴力平和隊の紹介にご活用ください。A5版・表紙カラー・一部300円（送料別）、ご注文は事務局まで。

▲◆◎⊕☐☒☒ 事務局便り ☒☐☐⊕◆▲

☞ 8月号の発送が9月にずれ込んでしまいました。早々に原稿を書きくださったみなさまにお詫びいたします。☞ やんごとなき一家に男児誕生とか。憲法が抱え込んだ矛盾としての象徴天皇制度。これを国民の名で廃止することができるまで、日本国憲法の民主、人権、平和の原理はけっして十全に活かせることはないでしょう。☞ 原稿や会報充実のアイデアを引き続き募集中。（中里見 博）

非暴力平和隊(NP, Nonviolent Peaceforce)とは……

地域紛争の非暴力的解決を实践するために活動している国際NGOで、非暴力平和隊・日本(NPJ)はその日本グループです。

これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために2002年に創設されました。非暴力・非武装による紛争解決が「理想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

NPは、地元の非暴力運動体・平和組織と協力し、紛争地に国際的なチームを派遣、護衛的同行や国際的プレゼンス等によって、地元活動家等に対する脅迫、妨害等を軽減させ、地域紛争が非暴力的に地元の人によって解決できるよう、環境づくりをすることを目的としています。

NPは2003年9月からスリランカでの活動を開始し、現在16カ国から25人のメンバーを派遣し活動しています。

